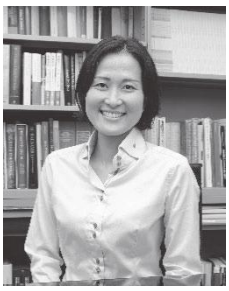

歴史からひも解くフィールドワークと地域の枠組みを捉える新たな視点のテリトーリオ

近畿大学工学部建築学科 講師

樋 渡 彩

1. はじめに 幼き時代の思い出

広島で生まれ育ったため、瀬戸内海はとても身近な存在である。そのなかでも、厳島は特別な存在で、毎年、春には花見を、秋には紅葉狩りのために、1年を通して訪れた。幼少期の一番の思い出は、毎夏、海水浴のために厳島に行っていたことである。廿日市市立宮島中学校を過ぎた辺りから獣道のような道なき道を通って浜に降りる。その浜は、今では牡蠣養殖のために杭がずらりと並ぶ場所になっているが、当時、杭はなく、プライベートビーチのように人も来ない（が、鹿は来る）小さな浜だった。満ち潮時には海水浴を楽しみ、引き潮時には潮干狩りに没頭した。で宮島に渡るという行為自体が非現実的であり、厳島に行くときはいつもワクワクしたものである。

中学生ではテニス部に所属していたのだが、夏の強化訓練と称した似島の経験も思い出深い。似島は急斜面の激しい山のような地形である。強化訓練では、その斜面地を利用して足腰を鍛えるというもので、高台に位置する神社の階段をダッシュで往復するというハードなメニューをこなした。普段、広島市側から似島の傾斜の美しさを感じていたが、その傾斜を身体で感じる貴重な経験だった。さらには、砂浜ダッシュも加わり、かなりきつかったのを覚えている。

2. 瀬戸内海を舞台にテリトーリオ研究を開始するまで

瀬戸内海を意識したのは、ヴェネツィア留学時に遡る。ヴェネツィアはラグーナという湿地帯に位置し、群島から成る究極の水の都市である。ヴェネツィアの周辺にも島がいくつもあり、それぞれ特徴をもつ。古くは、農業が主な生業の島、漁業を営む漁師町から成る島、検疫施設のみの島、修道院の島、現在では大学の島やホテルの島など、島それぞれに役割がある。しかし、どの島も平坦で起伏がない。こうしたラグーナの景色を眺めるにつれ、瀬戸内海の多島美に気付いたのである（写真１）。瀬戸内海とラグーナでは規模が全然違うが、瀬戸内海の島は起伏があり、遠目には山なのか島なのか区別がつかない。折り重なる島々が濃淡の風景を造り出し、まるで水墨画のような世界が広がる。この経験から、地元の瀬戸内海を対象に研究をしてみたいと思うようになった。

写真１　因島から見た瀬戸内海に浮かぶ島々（撮影：樋渡彩）

その約 10 年後の 2018 年に近畿大学広島キャンパスに着任したのをきっかけに、瀬戸内海を対象に研究を開始した。瀬戸内海を都市史の視点から「テリトーリオ」という地域の枠組みを検証する研究である。テリトーリオとは、「地域」を意味するイタリア語である。都市とその周辺地域をつないで広域的にその場所を捉える試みで、今まで自治体の枠組みでしか捉えていなかった場所を、産業や技術、人の交流、河川流域など様々な枠組みで捉え直し、その場所本来の姿を描くというものである。

そもそもなぜテリトーリオなのかというと、それも広島出身であることが大きく影響している。小学 3 年生次に牡蠣養殖は川の水も大事ということを知った。山に降った雨が地下水となり、川を通じて上流から下流に運ばれ、その水が牡蠣養殖に大きく影響しているという。後に、その話を思い出し、河川の上流と下流をつないだ地域の枠組みを考えていきたいと思うようになる。これがテリトーリオの視点である。ヴェネツィアの研究では、河川を軸にした木材産業から成る地域の枠組みを考察した。これまで分散していた様々な研究を上流から下流、そしてヴェネツィアまで繋ぐことで、かつて存在していた地域の在り方を示し、ヴェネツィアの発展の背景の側面を描いた。

この経験を活かし、瀬戸内海でも広域的な枠組みでその場所本来のアイデンティティを掘り起こせないかと思い、研究を開始した。幸い、広島にキャンパスを構える近畿大学工学部建築学科の学生は、地元が広島県のほか、福岡県、山口県、岡山県、兵庫県、愛媛県、香川県など瀬戸内海を囲む県の出身者が多い。そのため、学生自身の出身地を調べることからスタートできた。

3. 古地図を読み解き、現地で検証する面白さ

フィールドワークの準備として、都市史の分野では、まず古地図を収集し、その地図に何が描かれているのかを把握する。江戸時代の絵図はデフォルメと言い、重要なものが大きく描かれているため、その時代に重要視されていたものがわかる。例えば、広島には 1825（文政８）年に完成した「芸藩通志」の絵図から、山、主要な街道や河川、町や集落の地名が確認でき、江戸時代末期の広域的な位置関係を掴むことができる。この芸藩通志の特徴は、発展している町名が記載されているのはもちろんだが、何もないような集落名まで記載されている点である。

具体的な地形や土地利用を把握するには、明治時代まで待つ必要がある。場所によって測量の年代は異なるのだが、広島の場合は 1894（明治 27）年に大日本帝國陸地測量部によって測量された「2 万正式図」の地形図がある。この地形図を用いることで、開発が進でいないその場所本来の核となる部分を把握できる。城下町、港町、在郷町のように江戸時代に発展している町の場合は、都市計画や都市の骨格を把握できる史料が江戸時代からあるが、漁村や農村のような素朴な集落の場合は、史料自体が乏しく、歴史的に把握するのは困難である。そんな史料の乏しい場所でも、19 世紀末の地形図を用いることで、その場所本来の特徴を見出すことができる。

19 世紀末の地形図から土地の起伏や土地利用、道路幅、河川や水路の位置、町や集落の位置を確認し、町とその周辺、あるいは島全体といった広域でかつての姿を把握する（図１）。道路幅を把握することで、地域全体のヒエラルキーがわかる。歩行者しか通れないような幅の狭い山道は、現在の地図から消えていることも多い（図２）。また、町や集落については、もともとの核の部分を把握することができ、埋め立てや住宅開発される以前の状況が見えてくる。海に面して広がる集落、小川に沿って奥に伸びる谷地の集落、海から少し離れた高台の開けた地形に広がる集落、斜面地にぽつぽつと分散して建物が立地する集落など、地形と結びついて発展した集落構造が浮かび上がる。こうした分析のもとさらに町や集落を読み込み、フィールドワークの対象地を選定していく。

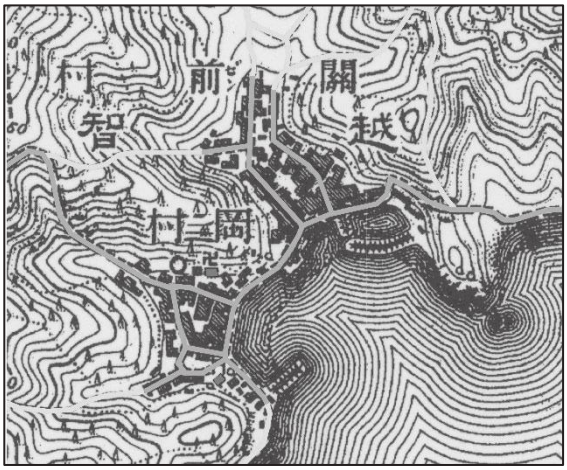

図１　岡村（1898 年）
道路幅に応じた色分け

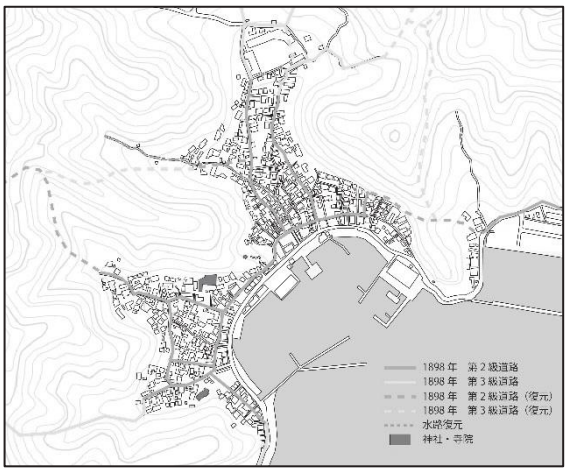

図２　岡村（2022 年）
1898 年の道路の復元

4. 中世から近世の空間構造を読む

瀬戸内海で中世と言えば、村上水軍が思い浮かぶだろう。村上水軍は、芸予諸島を中心に城を築き、瀬戸内海を支配した。その城の立地を見ていくと、航路の要になる箇所に位置する海城が多いことに気付く。標高 20m 以上に立地する傾向があり、中には標高 50m に位置する城跡もある。船の往来を見張っていたことが想像できる。実際に城跡を訪問すると、その多くが雑木林に埋もれている。地元の人にも知られていない城跡もあり驚いた。城跡も地域資源として再評価してはどうだろうか。

瀬戸内海には、神社が多いことも特徴として挙げられる。神社の立地に注目すると、海際に立地する神社、町や集落の中心にある神社、集落の背後に位置する神社などが挙げられる。また、中世は現在の海抜約４ｍに海水面があったという説もあり、その当時の海際と考えられる場所に神社が立地している場合も見られる。中世起源の神社は、海から垂直にアクセスする場合も知られている。海側に鳥居を設け、鳥居をくぐると急こう配の階段が伸びており、その上に神社が立地している。海に面した鳥居から、かつて船で直接神社にお参りしていたことが想像できる。フィールドワークでは、こうした神社の立地を確認しながら、かつての空間を復元的に考察する。

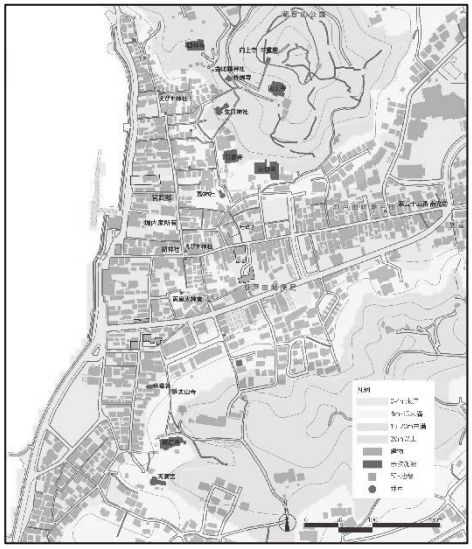

図３ 生口島の瀬戸田における宗教施設と標高

中世起源の神社が立地する集落の場合、標高 4-15m の間に密集した建物群を確認できる傾向がある。これは、海から少し高くなった安全な場所に居住地が形成されたことを意味している。その背後の標高 20m 付近には寺院が立地する傾向もある（図３）。

その一方で、江戸時代に形成された城下町や港町は、標高 4m 未満に広がっている。江戸時代は各地で都市建設や新田開発が進められ、広大に埋め立てられたためである。港町は、北前船の寄港により、物流が活発になり発展した。重要伝統的建造物群保存地区に指定されている竹原・御手洗・鞆・塩飽本島、町並み保存地区の玉島・下津井、造船で有名な牛窓など、重厚な商家が並び、江戸時代から明治にかけて繁栄したかつての姿を今に伝える。これらの港町では、なまこ壁、卯建（うだつ）、虫籠窓（む

しこまど）などの共通の建築要素が町並みを形成している。また、焼杉という、杉を焼いた黒い壁と漆喰で塗られた白い壁のコントラストが目を引く。このように個性的な港町だが、その背後には中世に形成された集落が位置していることが多く、地形と結びついた有機的な集落の在り方が見えてくる。そちらにもぜひ足を運んでいただきたい。

5. 素朴な集落の魅力

フィールドワークでは、ハード面の考察ばかりでなく、その場所をどのように使ってきたのか、地元の人にヒアリングし、ソフト面も掘り起こす。かつては商店が並び人々が往来し賑わっていた道、銭湯の存在、公共井戸を中心としたコミュニティなど、空間が生きていたことを認識していく。

価値ある話として記録するのだが、住民からは「ここには何もない」と、必ずと言って良いほどよく聞く。住民にとっては当たり前のような風景なのだろう。その度に集落の空間構造の特徴や、斜面地に立地する住宅、その基礎となる石垣、狭い路地、水路跡の湾曲した道、井戸、祠、漁師網、蛸壺の干してある風景などに価値があることを説明する。よそ者が見ることで、その場所を価値づけられることもあると再認識する。

次のようなエピソードもあった。フィールドワークである集落を訪れた時のこと。明らかに地元民でも、観光客でもないような、我々と同じような歩き方、撮影の仕方をする人に出会った。話かけるとテレビ関係者でいわゆるロケハンだった。旅行番組でどの集落が面白そうかを探してたようで、モニュメント的なものはないが、集落の空間そのものの魅力について意気投合したことを覚えている。

近年、しまなみ海道のある島を中心にお洒落な店が増えているという嬉しい動きもある。その島の出身者が戻ってくるUターンの方や、その島に魅力を感じたIターンの方によって、古民家をリノベーションした店やホテルがオープンしている。過疎化の進んだ集落も新しい動きにより変わり始めている。

6. おわりに 瀬戸内海の様々なテリトーリオ

瀬戸内海には個性ある町や集落が多いことを見てきた。その背景には、自然環境のなかで産業と結びついて発展してきたことが挙げられる。漁業・農業・造船業などの産業を軸に見ることで、本土と島の関係性や、都市と集落の結び付きが浮かび上がる。これらの繋がりが「テリトーリオ」である。

例えば、瀬戸内海の一大産業であった製塩業を見ると、塩の原料となる海水は瀬戸内海からだが、その海水を温めるための木炭あるいは石炭の産地、労働者の出身地、技術の伝播、出荷先などを統合すると、塩田を中心に地域の繋がりが見えてくる。これが製塩業を支えてきたテリトーリオである。

岡村島のみかん産業の例もある。岡村島は1950-60年代、みかん産業の最盛期だった。岡村島でみかんを栽培し、東京にも出荷するような「まるせき」みかんというブランドだった。ヒアリングした農家では、収穫時期の11～12月には、愛媛県松山方面、岡山県などから17人の日雇い労働者を雇っていたという。岡村島とその周辺地域が結びついていたテリトーリオの事例である。現在は島の多くが過疎化の問題を抱えているが、当時は島の方が稼げる時代だったこともわかる。みかん蔵には労働者用の住宅も付随しており、この土地ならではの蔵の在り方も見えてくる。

このように、瀬戸内海には様々なテリトーリオが形成され、そのなかで豊かな空間が育まれてきた。これからの未来を考える上で、個々で再生するのではなく、地域全体で総合的に価値を高めることが求められている。そのためには、テリトーリオの視点からその土地本来の地域同士の繋がりを捉え直し、現在、見えにくくなっているアイデンティティを掘り起こしていく必要があるだろう。